世界とドストエフスキー

亀山　郁夫

かめやま・いくお　1949年栃木県生まれ。名古屋外国語大学長。専門はロシア文学・文化論。「謎解き『悪霊』」（読売文学賞）など著書多数。

ロシアの文豪ドストエフスキーの生誕200年を祝う記念行事が、誕生月である11月（新暦）に大きな盛り上がりをみせた。サンクトペテルブルク、モスクワの大都市はもとより、『カラマーゾフの兄弟』の舞台となったスターラヤ・ルッサ、シベリア時代の作家にゆかりの地クズネツクなど地方都市でも行事が目白押しである。

来春に名古屋で予定されていた国際ドストエフスキー学会は、コロナ禍の完全終息を願って来年8月に延期されたが、世界各地からすでに150人のエントリーがあり、組織委員会として嬉しい悲鳴を上げている。

では、世界に遍く広がるドストエフスキー人気の秘密とは何なのか。それを簡潔に表そうとすれば、もはや模範解答めいた答えしか浮かばない。病める人間への洞察力と人間の生命の絶対性への揺るぎない信念。巨視的には、二極化という時代相の類似も見逃せない。皮肉なことに、グローバル時代が生んだ極端な格差社会は、21世紀の歩みを、19世紀の帝政ロシア時代へと後戻りさせてしまった。

□　□　□

「農奴解放」の失敗により帝政ロシアが大混乱に陥った1870年代、すでに円熟の境地にあった作家は、個々の悲惨な現実を目のあたりにしながら次のように書いた。

「社会の根幹にひびが入り、海はかき濁った。そして善と悪の（……）境界線が消えてしまった」

「解放」の夢は一時の幻想に終わり、信心深い民衆の魂は、「金」という新しい神に乗っ取られた。作家は、この混乱のさなか、最大の犠牲となったのが子らの世代だとみて、運命のなすがままに放置され、行き場を失った彼らの姿を「偶然の家族」という言葉で形容する。若い世代の精神的瓦解とテロリズムによる社会の分断は、表裏一体というのが、作家の根本認識だった。

そのドストエフスキーに、一般には「失敗作」とみなされ、ほとんど顧みられることのない作品がある。「五大長編」の一つ『未成年』（1875年）である。「失敗作」の理由について、あえてここでは触れない。物語の主人公は、貴族と農奴の間に生まれた20歳の青年。屈辱まみれの10代を生きた青年の告白をとおして、生き急ぐ子らの凄惨な末路がつぶさに描かれる。「ロシアは二流国、生きるに値しない」として拳銃自殺する青年、下賤な大人たちの色欲の犠牲となって首吊り自殺する極貧の娘。株券偽造に関わり、失意のうちに病死する若い没落貴族。

他方、作家は、そうした社会の「無秩序」をしり目に、驚くべきレジリエンスの力によって「偶然」の悪しき環から自立する主人公の逞しい姿を描く。彼こそがロシアの次の時代を切り拓く導きの星でもあるかのように。

作家はさらに、分断から社会を救う手立てを「文化」の力に求めた。

「わが国に、真の、ほんものの文化があったなら、わが国にはいかなる分断もけっして生じなかったのではないか」

ここでいう「文化」とは、人々の魂と心を照らし、生きる道を示す「精神の光」を意味する。

翻って、私たちの現代に、瓦解や分断を解消に導く「真の文化」を探り当てることは可能だろうか。否――。そうはいえ、現実に「瓦解」と「分断」は、私たちの生活を日々刻々蝕み、「海」は濁り続けている。生命の価値に対する想像力の枯渇、「ポスト真実」の恐るべき倒錯、民族差別、横行する詐欺、急増する自殺。思うに、生誕200年祭は、こうした厳しい状況のただなかで祝われているのだ。試練はコロナ禍だけではない。

□　□　□

先日、つい悲観に陥りがちな私を勇気づけてくれる一通のメールが地球の真裏から届けられた。アルゼンチンのドストエフスキー協会が、作家の誕生日にあたる10月30日（旧暦）の午後1時（モスクワ時間）から、『罪と罰』（しかも各国語で！）全41章を41人の朗読者で読みつぐ企画をｙｏｕｔｕｂｅで同時配信するという。

脳裏で、喜ばしい予感がはじけた。われらがドストエフスキーこそ、グローバル社会の「分断」を融和する「精神の光」たりうるのではないか、と。むろん現段階でそれは、私の過大な幻想にすぎない。しかしいずれ、爆発的に進化するＡＩの力を借りて彼の作品が少数言語に訳され、地球の隅々で「カラマーゾフ、万歳！」の叫びがこだまする時代が訪れるかもしれない。

今はそんな幸せな空想に酔いながら、2021年の記念すべき時を噛みしめるように生き、来夏の国際学会にむけて準備を急ぐ毎日である。

掲載日 2021年11月28日 日本経済新聞 朝刊 28ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。